

ウルリム  
響

# 響

特定非営利活動法人  
聖公会生野センター機関誌

第35号  
2005年5月20日発行

題字：康秀峰

URL <http://www.nskk.org/province/ikuno>

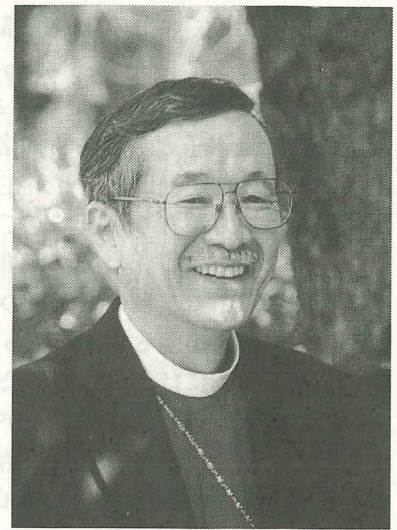
E-mail: [ikuno@nskk.org](mailto:ikuno@nskk.org)

## 食するという事

アンデレ 中村 豊

娘が高校時代、韓国と姉妹校ということで、高校生2名を我が家に1週間受け入れました。二人とも日本語がほとんど理解できず英語も通じず、日本の生活習慣について説明しようにも娘のほうも韓国語がままならず、従って食事の会話もぎこちないものでした。最初の夕食の時、珍事が発生しました。席に着き、はしをつけたとたん二人は突然席を立ちスーツケースからキムチを取り出して食卓に置き、出された皿と一緒に食べ出したのです。日本食は一般的に薄味です。香辛料をたっぷり使って食材を調理する韓国料理に比べ、もの足りなさを感じることは否めません。従って高校生が日本食と共にキムチも食べたい気持ちは十分理解できますが、これではホームステイの意図の一つである日本の食事とか生活習慣を学ぶ機会を失うことになりかねません。家人に、「そのキムチを引っ込めるように」といっても、「相手の好きなようにさせてどこが悪いねん」と反論されました。数年前、下関一釜山フェリー就航記念行事の一つとしてNHKラジオが釜山の市場風景を生中継しているのを車で偶然聞きました。レポータ

ーであるNHKアナウンサーが市場で売っているキムチを一口入れるなり、「辛い！こんなものとても食べられません」とつい本音を吐いてしまったのです。言ったとたんこの発言が韓国の人たちの



心を痛く傷つけ、もしかすると日韓友好に支障をきたしたらまずいことになるのとっさに感じ取ったのでしょうか。レポーターは汗だくで前言を翻すことにやっきになり、市場のレポートどころではなくなってしまいました。

特定の民族が好んで食する料理の背後には必ずといっていいほどそれを創りだした人間の知恵と工夫が存在します。その料理を食することを軽視するような振る舞いにでるといえることは、相手の尊厳さえも傷つけかねないのです。料理はその民族がどのような生活をしているかの表現の一つなのです。

聖公会生野センターの周辺地域は日本人だけが住む社会とは異なる独特の慣習や文化が形成されていると思います。それはまた発展途上でありましょう。互いの食生活や習慣を尊重し、まずはさておきテーブルに座り共に食することから相互の理解が開始されることは間違いありません。

(なかむら ゆたか 日本聖公会神戸教区主教)

### もくじ

1. 食するという事
2. 時のしるし 現場での「出会い」
3. 「学力低下」論争で欠落した視点
4. 大阪教区後援会訪韓旅行
5. /
6. こんな本あります 「本から在日コリアンを考える」②
7. 詩『在日第三の道』
8. こう変わる・変わった=聖公会生野センター法人化=①
9. クリンもたんの日常から
10. 編集委員リレーエッセイ/余韻

私は、大学では工学を学んでいた。研究していたのは、アモルファス金属である。アモルファスとは非晶質金属のことで、金属結晶がないために抵抗が少なく伝導率なども優れている。リニアモーターカーや、太陽電池に用いられる素材である。そんな私が、今何ゆえに、こんな道に進んでいるのか。それは私が学生時代に経験した様々な出会いによる。

京都の大学に入学した私は、誘われるままに、ある子ども会サークルに入った。そのサークルが活動の拠点としていたのは、京都駅南側にある東九条の公園だった。私は、後からその地域が在日コリアンの方が多く住む地域であることを知った。公園で遊ぶ子どもたちも通名の子もいれば、本名の子もいたが、ほとんどが在日の子たちだった。彼らは、力が有り余っていて、私はいつも傷だらけになった。屈託のない笑顔の子もたちの生活に触れる中で、私は東九条の歴史や、在日の方々の生き様に接するようになった。

そのサークルには、当時、聖公会で青年活動を中心的に担っていた八幡明彦氏がいた。偶然、私も聖公会の教会に関わりを持ち始めた時であったこともあって、八幡氏から誘われて、聖公会SCM（学生キリスト者運動）やNCC（日本キリスト教協議会）青年協議会の活動にも加わるようになった。聖公会SCMは沖縄でセミナーを主催し、私は沖縄のハンセン病療養所である愛楽園で、元ハンセン病の方々との出会いを経験した。また、当時ようやくその存在が明らかになった、沖縄戦での強制集団自決の現場であるチビチリガマの中での衝撃は忘れることができない。NCC青年協議会では、在日大韓基督教会の青年たちと出会うことができた。彼らからは、いつも厳しい問いを受けた。一緒に酒も飲んだ。鴨川の河原で、韓国の民衆運動歌を大声で歌ったこともあった。その世話になった在日大韓の先輩青年の一人が、今はこの聖公会生野センターで主事をされている呉光現氏である。東九条でも、エキシメニカルな取り組みとして、キリスト者東九条現場研修会が開始され、私は、東九条という現場で労働をし、歴史と現実的課題を学び、語り、そして聖書と出会った。私が労働経験をさせていただいたのは、小さな古鉄工場だった。古鉄工場のハラボジは、決して強制連行の歴史も、戦後の苦労も何も話してはくれなかった。いつも穏やかにタバコをふかしていた。しかし、ある時ふと、少し曲がったその背

## 現場の「現場」

## 西原廉太

中が、彼の歴史と物語をすべて語っているように思えて、涙があふれて止まらなかったことを記憶している。

東九条である一人の同い年の在日青年と仲良くなった。毎晩のように九条の屋台のネギ焼き屋でマッコリを飲んでいて。彼は就職差別で仕事につけず、彼のお姉さんは結婚差別で自殺未遂をした。いつものように飲んでいてある晩、私は彼にこう言った。「おれとお前は同じ人間や。おれは決して差別なんかせえへん。」すると、その彼は、すくくと立ち上がり、私の胸倉を掴みながら、「あほか。れんとおれの立ってる場所は、ぜんぜん違うわ」と叫び、思い切り私を殴った。本当に痛かった。その痛みとは体の痛みではなく、むしろ、結局、何も分かっていなかった自分に対する痛みであった。それ以来、私は、自分がどこに立っているのかを、常に問うようになった。決して第三者的立場などはない。足を踏まれている側と、足を踏んでいる側であり、私は紛れもなく後者に属する者である。踏まれている者の叫びに耳を傾けるだけでは何も変わらない。私が、他ならない私自身が踏んでいるその足に気づき、足を外すことに責任を持つこと。その思いは、今もまったく変わらない。私自身の原点でもある。

この時に私が出会ったもう一人の人物は、福音書のイエスであった。彼は「貧しい人に福音を告げ知らせるために」「捕らわれている人に解放を、眼の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由に」（ルカ4章）するために遣わされた。彼は「失われた者を尋ね求め、追われた者を連れ戻し、傷ついたものを包み、弱ったものを強くする」（エゼキエル34章）ために遣わされた。私は、このイエスと、東九条という現場の中で出会ったのだと思う。

4年近くもこの『ウルリム』に拙文を書く機会を与えてくれた聖公会生野センターと、さまざまな応答をいただいた読者諸氏に心から感謝をしたい。なぜならば、ともすると忘れがちであった私自身の原点を、今一度、思い起こすことのできる貴重な場でもあったからである。次号からは、私の恩師でもある井田泉司祭が担当される。井田先生の、まさしく預言者のように「時のしるし」を明らかにするその鮮烈なメッセージを、私も一読者として楽しみにしたい。

（にしはられんた 中部教区司祭 立教大学教員）

## 「学力低下」論争で欠落した視点

## 金光敏

大阪市の場合、就学に必要な経費（給食費、学用品購入費等）を公的に援助される「就学援助金」の受給世帯は、大阪市立学校に就学する児童生徒の20%を超え、地域によっては、大阪市の平均値を2倍、3倍上回る学校も少なくない。また、高校受験では経済的理由から公立専願者が増えている。

そうしたケースを見ても、「学力」を付けていくために必要な、情緒的安定感を欠いた子どもたちが増え、授業中に眠たくなならないように十分な睡眠時間を取る、規則正しい生活を送る、子どもの心身の発達にとって、このいたって当たり前のことが、いま最も難しい状況になりつつある。

日本の学校教育は、産業界が必要とする人材の育成を一手に担ってきたと言っている。言わば、日本の教育政策は、経済界の意向を踏まえ、労働力の安定供給をその使命としてきた。高度経済成長期には、知識中心の均一な集団教育が自明のこととされ、経済低迷期の今、今度は国力の高揚を目的に、教育に能力主義が持ち込まれている。文部科学省は、産業界の望む人材育成に従順だとの批判は免れない。

「学力低下」問題の原因となる家庭力の回復に、雇用の安定と生活水準の維持は不可欠だ。このまま雇用が流動化し、社会保障に自助、受患者負担の論理が浸透すれば、子どもたちの依拠する家庭の分散はさらに進み、もはや家庭が子どもたちに安定を提供する場所ではますますなくなる。子どもの「学力向上」のためにも、家庭力回復を支援する雇用政策と社会保障政策が必要である。そのためにも、日本の教育政策に産業界の意向を反映させるのではなく、経済・産業政策に教育界の意向を反映させることが望まれている。

文部科学大臣の役割は、子どもの生活環境を整備する観点から、小泉首相に経済政策の転換を進言することであり、「学力論争」に軽率に加わることはない。ましてや「学習指導要領」を頻繁に変えるようでは、教育政策に信頼など生まれるはずがない。教育省なのだから、子どもの視点に立った政策遂行に当たってほしい。

（きむ・くあんみん コリアNGOセンター事務局長）

中山文部科学大臣は学習指導要領を見直し、「ゆとり教育」を改め、基礎学力を付けるために、現学習指導要領中の「総合的な学習の時間」の削減について言及した。

昨今の「学力低下」問題で、「ゆとり教育」が批判的になっている。この「学力低下」と「ゆとり教育」との因果関係は、研究者や教育団体によって意見が様々で、中山文科大臣の言う「ゆとり教育」の見直しは、即「学力向上」につながるのか、必ずしも明確にはなっていない。

私は、学校教育に関わる立場から、「学力低下」論争で欠落している点について触れたい。昨今指摘されている「学力低下」問題は、学校で何を教えるのか、学習指導要領をどう改訂するのかという捉え方が中心で、教育の理念や手法をめぐる論争になっている。そうした論争に注目しつつも、私自身の捉え方では「学力低下」問題は、実は、教育論の範疇を超えているとの考えを持っている。「学力低下」と関わって目を向けられるべき課題に「家庭力」がある。実際、学校教育に関わりながら、家庭の教育力が、子どもの学力に何らかの影響を与えていることは実感としてある。しかし、それは単に親の学歴や親が子の勉強を見る、あるいは親子愛の希薄化などの、言わば単純化された「家庭力」の問題ではなく、「親（保護者）」を取り巻く社会構造上の問題をむしろ深刻に捉える必要があるのではないかと。バブル経済崩壊後の急激な産業構造の変化に伴って、終身雇用は衰退し、日本経済を支えてきた中小零細企業は軒並み解体の一途で、雇用は不安定化している。一方で、雇用者に有利な雇用法制が整備され、契約社員や派遣労働、アルバイト等の非正規労働者が日本の経済を支えている。その結果、正規と、非正規労働者間の収入格差は広がるばかりで、家計を支えるための共働きはもちろん、両親が就労時間のちがう職業に互い従事し、これまで以上に昼夜問わず働かないと家計が成立しない状況がある。

また離婚率の上昇による母子家庭や父子家庭の増加で、夜間に親が帰宅するまでの間、子どもだけで過ごす家庭は、今やまったく珍しいものではない。

## 韓国旅行で感じたこと

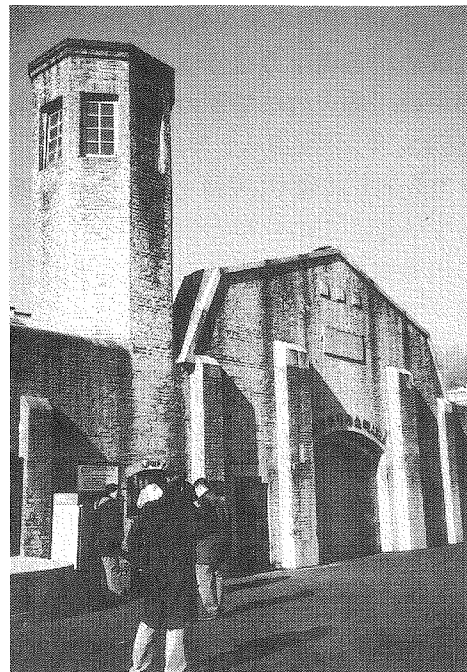
田中燕美子

「日韓の歴史を学び、大韓聖公会の方と交流する」というこの旅の前半で、余りにも重いものを感じた。過去の日本がしたことと、それを引きずっている韓国の人達。日本人として韓国にいたことが申し訳ない気持ちになった。前髪に白いものが目立ち、食事がのどを通らなくなった。独立のために戦った柳寛順について等、生きた歴史教育の場となっている西大門刑務所歴史館、三一独立運動の大レリーフが並ぶタブコル公園、安重根義士記念館の3ヶ所の見学から、歴史認識や教育に対する日本と韓国の違いも伝わった。韓国の人達は「おかしい！」と思ったら動き出している。植民地時代や独裁政権時代をこえて、民主化運動を経験しているお国柄のせいだろうか。それに比べ、日本人はありのままの歴史について学ぶ機会も少なく、ぬるま湯のような生活を送り、政治的なことは「むずかしい」からと避けようとする。

大韓聖公会の金司祭から「外貨危機以後家庭崩壊や老人、子どもへのしわよせがあり、ホームレスの人達のための食事や世話をしている」ことや「医療・教育・文化・福祉面で南北の子どもの格差をうずめる『南北子ども基金』財団を作ろうとしている」と社会宣教の働きを中心にレクチャーを受けた。ソウルの聖公会大聖堂で水曜日におにぎりコンサートを開き、その収益で金曜日に大学路昼食サービスをしていて、私たちが訪れた日は寒い中80人の人達がとりのスープとごはん、キムチ



ソウル教区大聖堂 ミサのあと



西大門刑務所 歴史館

人集まることもあれば、30人のこともあるという。楽しいアイデアでいろいろな立場の人が協力して続けておられるのがすばらしいと思った。

聖公会大聖堂に隣接する聖架修女院を訪れた時、前院長から「月一回、聖公会、カトリック、仏教の尼僧が集まり、宗派の違いや葛藤を乗り越え、研修会を持っている。共に祈り、食事をとり、話し合い、互いの聖地巡礼もした。その体験談を本にして韓国やイラクの子どものために役立てている。女性の力も積み重ねれば世界の平和のためにもなる」と静かな口調ながら、力強いメッセージをいただいた。修道女の作った木の十字架を買い求めたところ、前院長が私の方を抱くようにして、十字架に触れながら「イエスさまイエスさま… I LOVE YOU と祈るのよ」と笑顔で教えてくださいました。

祈りと学びと交流の場を与えられたことを感謝しつつ、私も自分でできることから始めよう。自分の言葉で伝えればいいんだと思えて少し気持ちが軽くなった。日本と韓国との歴史に思いを巡らせつつ、交流の発展を願っている。

(たなかえみこ 川口基督教教会信徒)

の昼食サービスを受けておられた。ボランティアは聖公会以外の人や中学生も含み、皆誇りを持っているとのことだった。ちなみにおにぎりコンサートは出演者の顔ぶれにより、1000

## 訪韓の旅

堀江富美



炊き出しのバスの前にて

早春とはいえ底冷えのする2月下旬、聖公会生野センター大阪教区後援会企画「訪韓の旅(三泊四日)」に参加した。到着したソウルの街の印象は、大阪の街とさほど変わりなく、ただハンゲルの標識や看板だけが「違い」を表しているように見えた。ところが、この印象はその夜一変した。韓定食に案内された料理店は昔の貴族の館を利用したものらしく、部屋の造りは重厚で、建具の細工も凝っている。次から次へいつ果てるとも知れない数の料理が運ばれて、雰囲気も胃袋も思い切り韓国を実感してしまった。臨席くださった大韓聖公会社会宣教部の金司祭から、近代化した韓国社会が抱える諸問題や、それらに対する大韓聖公会の熱意ある取組みなど詳しく伺うことが出来た。大韓聖公会は他の教団と比べて小さいにもかかわらず、社会福祉事業に於ける働きは大きく、政府からも期待されている。

翌日は、日韓の歴史の学びとして、「西大門刑務所歴史館」、三一独立運動を開始した「タブコル公園」、「安重根義士記念館」を訪ねた。殊に「西大門刑務所歴史館」は、日本植民地時代の想像を絶する韓国・朝鮮人の痛みや苦しみが直に伝わってくることであり、苦しみを与えた側の日本人としても激しい心の痛みを感じずにはおれない。

昼休みの時間に、大韓聖公会の「フードバンク」のボランティア活動に参加させてもらった。食堂に改造されたバスの中で100人程の失業者やホームレスの人たちに給仕をしたが、寒空に暖かい雑炊

とキムチが如何にも美味しそうだった。その日の夕食の席では、「ウルリム」の現地コラムニストでもある姜恵楨さんが日韓問題の現状や問題点を熱く語って下さり、それに加えて婚約中の日韓カップルも登場、真に目出度く嬉しいひとときとなった。

この旅行のハイライトは、何と言っても三日目の江華島、聖公会江華聖堂訪問だった。1900年に完成したこの教会は、英国人が韓国の情緒を重んじて設計したもので、文化財に指定されている。礼拝堂は、祭壇と会衆席の間に木の格子のスクリーンがはめてあり、聖堂を出ると鐘楼の中に大鐘が地表近く堂々とぶら下がっていて、更に趣を添えている。葬送式には死者の年の数だけ鳴響くというこの鐘の音を聞いてみたかった。

旅行の締め括りにふさわしく、4日目はソウル大聖堂の聖餐式に出席した。礼拝後、朴被選主教(現・主教)は執務室に私たちを招き入れて親しく歓談して下さい、その温かいお人柄に惹かれた。隣接する聖架修女院も訪問、前カタリナ修院長から修女会の働きについて興味あるお話を伺った。

この旅行中、韓国の人々との交流の場が多く与えられ、韓国を肌で感じる事が出来たのが何より嬉しい。私たちを導いて下さった齊藤司祭、企画から行き届いた案内と通訳までして下さい、呉光現総主事、旅行社の北谷兄に心から感謝申し上げます。

(ほりえ ふみ 石橋聖トマス教会信徒)



江華島聖堂

## 本から「在日コリアン」を考える ②

### 上海臨時政府—呂運亨 評伝2



姜徳相著  
定価 6000円+税  
新幹社

#### 上海臨時政府

朝鮮の独立に人生をかけた運動家・呂運亨

大韓民国上海臨時政府という、あまり好いイメージがない。1919年の三・一独立運動後、いかにもアリバイのように樹立した政府のような印象が強い

からだろうか。また「臨時」という名称もマイナスイメージになっている。

今回は姜徳相著『上海臨時政府』を作って考えを改めたことを2点ほど取り上げてみたい。

第1点目は冒頭に書いた私の抱いていたイメージと異なって上海臨時政府は、実際には朝鮮半島本国は言うに及ばず、中国東北部、シベリア、日本、アメリカなどに生きる同胞たちと深く連携を持って成立していた。帝国日本に対峙したその政治力は決して無視できるものではなかった。とりわけ李東輝・安昌浩・呂運亨らが手を組んでいた臨時政府の初期は、まさに朝鮮を代表するものであったといえよう。たとえば呂運亨が組織していた新韓青年党などは、後に新韓という呼称が反日的であると使用できず新幹会となったというほどで、仮に新韓青年党の上海における活動が生ぬるいものであったなら、新幹会の社名も新韓社となっていたかも知れない。

海外の亡命政権であった制約上、限界もあった。だが、これを中国革命とのからみで考えた時、上海という地の利は大きかった。世界の情報が集まる中、アメリカへ依存する独立運動路線をとるか、ソビエトと連帯する独立運動路線をとるか、臨政の中は大きく揺れた。また臨政における派閥争いも絶えず、臨政樹立の趣旨が貫徹できたのも2~3年と短かった。これらは現在の在日同胞社会にも通じる歴史性を感じさせる。同じ過ちを繰り返

さないようにと心がけねばならなかった……。

第2点目は、社会主義思想についてである。上海臨時政府はのちの金九に代表されるように、民族主義的傾向が強く印象づけられている。だが解放後の大韓民国が反共を国是として、後に作った歴史像があるのだろう私は若い時に岩波文庫の『朝鮮文学短編選』を読んだことがある。その時の解説にも書かれていたが、ヨーロッパの近代思想の多くは日本を経由して植民地朝鮮に入っていた。これは順当な解説であろう。私はそう受け入れ、マルクス主義思想もその延長線上に考えていた。

ところが、そう単純ではなかった。三・一運動が中国の五・四運動に強い影響を与えたように、中国革命に与えた呂運亨をはじめとする朝鮮人社会主義者たちの歴史的役割は大きかった。一方、大杉栄の『日本脱出記』にあるように、上海で大杉栄は李東輝や呂運亨らと1920年に会っている。日本の社会主義運動に上海に集まっていた朝鮮人が与えた影響ははかり知れないものがあるのである。

過酷な植民地支配であったからこそ、日本や中国より朝鮮のほうが社会主義思想が早く強く受容されていったと思われる。ヨーロッパの新思潮が日本経由で伝播されていく中、社会主義思想だけは朝鮮が近隣の国々に影響を与えたと言えるかも知れない。私にとっては一つの発見であった。

三・一運動→五・四運動という東アジアの民衆の胎動は偶然に起きたのではなく、地下水脈のような連携のもと、大きなうねりとしてあった。それに対する日本の回答が関東大震災の虐殺であったり、中国東北部での毒ガスをも使った大量虐殺であった。

従来、あまり重視されてこなかった上海臨時政府に対する研究水準が本書でぐっと高まったと思う。(こ・いーさむ 新幹社代表)

『上海臨時政府—呂運亨評伝2』は聖公会生野センターで取り扱っています。  
TEL 06-6754-4356 FAX 06-6754-4357  
e-mail: ikuno@nskk.org

### 高二三

二者選択をせまられるのでは誰のための統一への手順か  
北と南に属した者のためだけの統一か  
統一への志操貫き  
分断の不条理への加担を拒んで  
北にも南にも属さない在日が  
歩んできた第三の道  
まだ遠い道のりの途中  
尽きせぬ歩み

北か南に属していても  
分断の疾しさにさいなまれながら  
統一を志向している者たちの  
それぞれの道と並存する  
また別のこの道が  
よく行き詰まりがちな  
南北それぞれの道で  
躓く者たちに  
更なる歩みを  
促す力となり得ることを  
信じている者の道  
か細くとも  
確かな足取りで  
踏み固められる  
第三の道  
統一まで続く

詩集『マウムソリ—心の声—』より

## 在日第三の道

### 丁章

丁章 (ちょん・ちゃん)

1968年、京都市にて出生  
大阪外国語大学Ⅱ部中国語学科卒業  
現在、大阪府東大阪市在住  
著書  
詩集『民族と人間とサラム』(新幹社)  
詩集『マウムソリ—心の声—』(新幹社)  
詩集『闊歩する在日』(新幹社)

マウムソリは聖公会生野センターでも取り扱っています。

## お金の話からすみません —会員制度がはじまりました—

呉光現

3月28日に聖公会生野センターは「特定非営利活動法人 聖公会生野センター」となり法人になりました。特定非営利活動法人とは略してNPO法人とも言います。NPOとは英語の「Non Profit Organization」の略で、直訳すると「非営利組織」となります。要するにこれまでの公益団体だけでは担えないさまざまな社会活動を法人として取り組めるようにしたものと言えるでしょう。NPO法人では会員（法の条文では社員となっています）組織にすることが定められており、聖公会生野センターも会員組織になりました。今回は会員とお金について述べたいともいます。

聖公会生野センターはこれまでの後援会員制度から正会員と後援会員に分けることになりました。一言で言うと正会員は聖公会生野センターの運営に参画すると言うことです。参画といっても日常の活動に参加せねばならないというわけではありません（もちろんボランティアとして関わってくださるのは大歓迎です）。聖公会生野センターの活動に特に関心を持ち関わってほしいと言うことです。具体的には年に1回開催される会員総会に出席をして（委任もOK）意見を述べ、議決権を行使することが基本的な権利と義務です。要するに

緩やかですが聖公会生野センターの内部の人・団体になると考えて良いでしょう。理事も正会員の中から選出されることとなります。そこでこれまでの年額3000円の後援会費ではなく年額5000円の正会費に設定させていただきました。

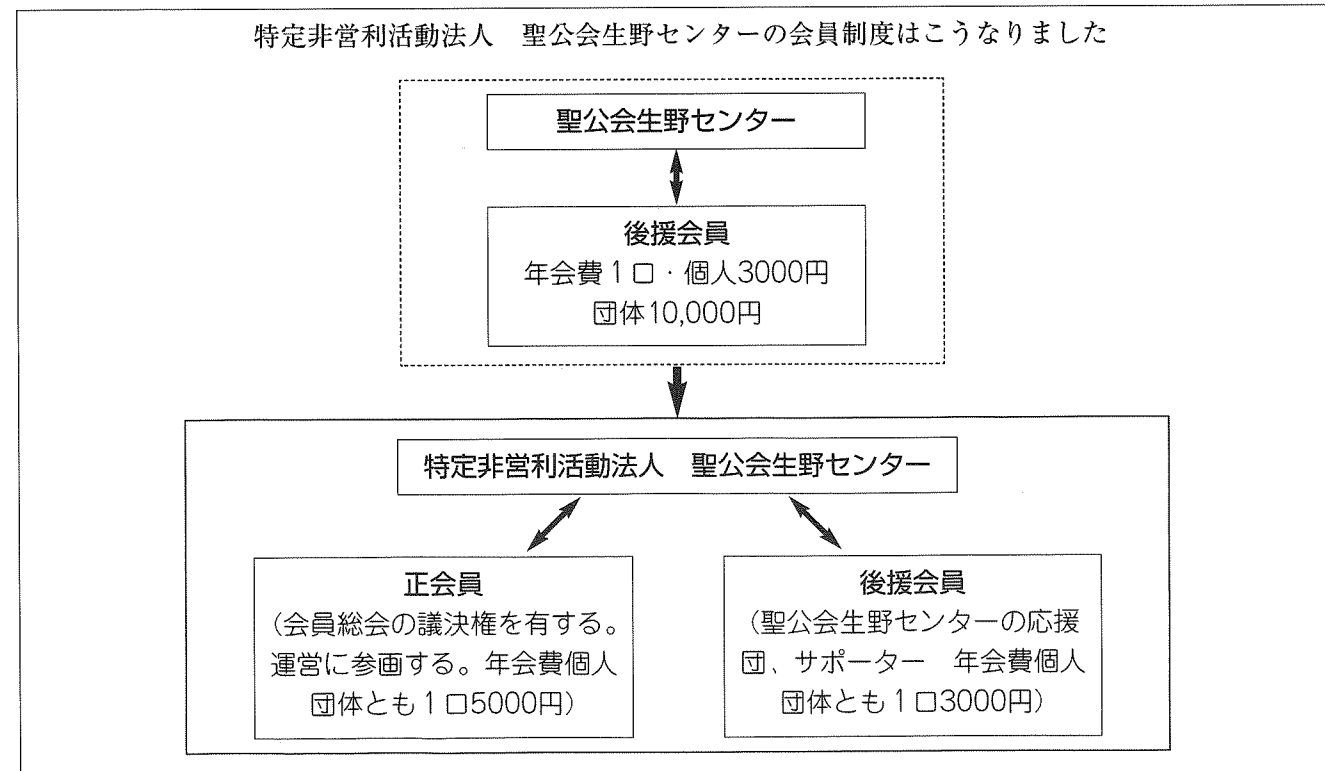
後援会員は従前通りと理解して下さってかまいません。年額3000円の後援会費です。後援会員は総会出席の義務や議決権等はありません。権利と義務はないわけです。ようするに応援団であり、サッカーで言うとサポーターになるのでしょうか？もちろん年に1回の通常総会には傍聴者として参加して下さるのは大歓迎です。

これからは正会員の意志と決定によって聖公会生野センターは歩いていくこととなりますが、聖公会生野センターとしては1人での多くの正会員を獲得していきたいと願っています。そのことがNPO法人として幅が広く、底が深い活動を推進していく原動力になっていくのではないのでしょうか？

今回は特定非営利活動法人 聖公会生野センターの組織形態について述べます。

（お・くあんひょん 聖公会生野センター総主事）

特定非営利活動法人 聖公会生野センターの会員制度はこうなりました



## クリンもだんの日常から

村上 恵依子

日頃、聖公会生野センターは何をしているのかわからない（知らない）…。という声をよく耳にします。聖公会生野センターの働きがわかっていたらいいように報告するのも、ひとつの大切な働きだと考え、前号から活動の報告をしています。今回は「クリンもだん美術教室」の報告です。

クリンもだん美術教室（以下クリンもだん）は1993年に生野センターと同時にスタートし、今年で13年目を迎えます。2004年からはのりばん（34号参照）の隣に教室を移転しました。（センターの事務所のすぐ近くの長屋を2軒借り、1軒をのりばん、1軒をクリンもだんで利用しています。）現在クリンもだんには10歳から27歳までの15名の生徒が通い、その約3分の2がしょうがい者です。でも、しょうがいのあるなしにかかわらず、皆で一緒に、絵を描いています。クリンもだんが移転してから、送り迎えする保護者の方が授業中は隣ののりばんで保護者同士で話をしながら待つようになりました。その間にいろいろな話がされており、クリンもだんがこれからどう発展してほしいかやしょうがいを持った子どもを育てる大変さ、つらさをお互いに話し、助け合うという交流の時間にもなっているようです。

通ってくる生徒たちはみんなとても明るくてにぎやか。時には一人が笑い出せば、伝染して近くにいる生徒たちも笑い出し、誰にも止められなくなります。水曜日は年齢の近い生徒が増え、向き合って相手の絵を見ているだけで面白らしく、何がおかしいの？と聞けば、よくわからないと言ひ、鉛筆が転がっただけでも、吹き出してしまふようです。また、土曜日の授業は音楽をかけながらやっています。かかっている曲は、毎週同じで、必ず「マツケンサンバⅡ」です。毎週飽きずにかけます。先生が違う曲を流そうとチャレンジしても、全部聞かないうちに「マツケンサンバⅡ」にかえてしまいました。おかげで、土曜日の授業の後は、先生も私もボランティアさんもみんな「マツケンサンバⅡ」が頭の中をぐるぐる回っています。



私がクリンもだんに関わり始めたころは、不安がありました。絵心がないということと、知的しょうがい者とかかわった経験が少ないということです。生徒にどう接したらいいんだろう、こんな自分に何ができるだろうか。でも、私が生徒たちに何かできる、何かしてあげようなんて傲慢で、私は生徒たちからもらってばかりでした。どう接したらいいか、教えてくれたのは生徒たち自身だったし、絵心がないといっても、評論家じゃないし、素直に感じたままを言葉にすればいいということも生徒たちが教えてくれました。そして、しょうがいのある生徒もそうでない生徒もみんな誰にも真似できない、それぞれの光った感性で作品をつくっています。その感性は一人一人、本当に素敵です。私は、このクリンもだんに関わるまで、しょうがいのあることは、特別なことなんだと思っていました。確かに、この社会の中で、小さい者にされ、暮らしにくさを強いられているかもしれません。でも、特別だと思わなくてもいい、特別な接し方なんてしなくていいんだ。ということ、生徒たちとの関わりの中で教えられました。特別だと思うから、接し方に戸惑ってしまったり、何かしてあげなきゃって思ったんじゃないかと気づかされました。今は、どうやって生徒たちとその時間を楽しく過ごせるかを考えています。

私がクリンもだんに関わり始めて約一年半、見えてきたことがあります。生徒たちにとって、クリンもだんという場所で過ごす時間は、かけがえのない自分の居場所になっているということ、自分が主役になれる時間であるということです。生徒たちは絵を描くという表現方法を通して、確実に成長しています。だから、このクリンもだんは生徒たちにとって、なくてはならない場所だと実感しています。私たち聖公会生野センターのスタッフは全力でその場所を守りたい。それと同時に発展させていきたいと考えています。

当面の課題は、現在養護学校に通う高校三年生の生徒が4人で、彼らの卒業後のことをどれだけクリンもだんと聖公会生野センターで支援していくことができるか。お母さんたちにとっても、クリンもだんにとっても切実な課題です。

最後になりましたが、毎年秋に「クリンもだん美術展」と称し、生徒たちの作品展を行っています。毎年いろいろな工夫を凝らしています。今年も企画が始まりました。絵心のあるなしに関係なく、生徒たちの光った作品を皆さんの目で確かめにきてください！！皆さんのお越しをお待ちしています。

（むらかみけいこ 聖公会生野センターアルバイトスタッフ）

齊藤 壹

生野、鶴橋界隈に住み始めて丸4年になる。仕事柄、心に悩みを持つ人、生き方に迷う人の相談を受けることは多い。ここは住民の4分の1が在日韓国・朝鮮人であるといわれる地域だが、それでも私の知り合いは圧倒的に日本人が多い。ところが、私が悩みを聴く人の割合は、現状を増幅するかのよう「社会と病」に圧倒的に在日の人が多い。心身の調子がおかしくなる状況に置かれていることがそれだけ多いことを反映していると思う。在日が多い生野においてさえそうである。ましてこの広い日本の中で在日として生きることはどんなにか困難の多いことであろう。ニュージーランドで実施された調査で、先住少数民族における精神疾患の罹病率が高いことを見たことがある

が、少数者の置かれた状況ではあり得ることだと言えよう。徐々に状況は変わってはきているとは思ふ。しかし、来談者の内面を、家庭の状況とともに聴く時、本人や家族を取り巻いて、少数者を生きにくくさせている日本を感じずにはおれない。例えば、医者や学者など、安定した生活が可能な職業を目指させる家庭、そこに生まれる軋轢や挫折、結婚や就職での不当な差別、傷つくことを恐れるが故に深入りをしない人との関係、そういった様々なことがつきまとい数世代を重ねてきた在日の今日がある。人を病気にする、病んでいることに気づかない日本がある。

今の生活の中から、「外国人が暮らしやすい社会は日本人も暮らしやすい」という標語を、心からそう思える今日この頃である。

(さいとう はじめ 編集委員)

余韻

■4月に吹き荒れた韓中での反日の嵐。韓中と日本の世論の「温度差」の大きさに驚いた。先日韓国と台湾のハンセン病回復者の証言集会に出かけた。日本と違い「星が見える時(夜明け前)から星が見える(日没まで)まで」強制労働されたという。その労働も商品や軍需物資であった。まさに植民地民衆に奴隷労働を強いた歴史がある。温度差を埋めるためにはやはり日本が歴史に謙虚に

なるべきではないだろうか?訪韓の旅の波紋が大阪教区の人々に広がっていくことを期待したい。  
■西原さんの「時のしるし」は今回で終了です。ありがとうございました。初代の松山献さん(京都教区信徒)、西原廉太さんの論調のおかげでウルリムの紙面はずいぶん充実してきました。次回からの井田泉司祭にも期待しています。

(ピクファンチャ)

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

- ◇正会費 年額 1口 5,000円
- ◇後援会費 年額 1口 3,000円
  - ・郵便振込00960-0-133429 「聖公会生野センター後援会」
- ◇自由献金・クリスマス献金
  - ・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」
  - ・銀行振込 U F J 銀行 東大阪支店  
普通預金 3711311 「聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター

〒544-0003

大阪市生野区小路東1-17-28

TEL06-6754-4356/FAX06-6754-4357

E-mail: ikuno@nsskk.org

http://www.nsskk.org/province/ikuno

発行人：宇野 徹

編集人：大橋 襄

ウルリムは古紙100%の再生紙を使用しています。